

## 主の変容

2017.8.6

マタイ 17・1-9

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高神父

今日8月6日の主日の典礼は、主の変容の祭日を祝っています。同時に、今日8月6日は、広島原爆の日でもあります。わたしたちの日本のカトリック教会は、教皇ヨハネパウロ二世の広島訪問を期して、8月6日から15日までを平和旬間と定め、各教区で特別な企画を計画し、平和祈願ミサをおささげします。東京教区ニュースの8月号には、東京教区で行われる催しの予定が掲載されていますので、ご覧になってください。すべての催しに参加することはできないまでも、心を合わせてお祈りいたしましょう。

今日の福音のご変容の場面には、愛する御子を指し示しながら、「これに聞け」という御父の御声が、弟子たちを覆った光の雲の中から響いています。このような連想が許されるとするなら、あのご変容の山で弟子たちを覆った光の雲は、あの日、広島や長崎の上空を覆った原爆の雲を思い起こさせます。あれから何年たっても、あの雲のもとに響く「これに聞け」という声をかき消すことはできません。かき消されるままにしてはなりません。

そのような思いで、あらためて今日の福音を味わうことにしましょう。今朗読されたのはマタイによる福音ですが、ルカ福音書による同じご変容の場面では、ペトロ、ヤコブ、ヨハネの三人の弟子を伴って高い山に登られたイエスはそこで祈っておられたと語られています。イエスは何を祈っておられたのでしょうか。今日の福音の前の個所には、付き従ってきた弟子たちに、行く手に待ち構えているご自分の受難の死を打ち明け始めるイエスのことばが記されています。イエスはあの祈りの中でそのことを思っておられたにちがいありません。ご自分の行く手に待っている受難の死を御父の御旨として受け止める決意を固めて祈っておられたにちがいありません。同時に、ご自分が告げることを受け入れかねて、「主よ、そんなことがあってなりません」といさめようとしたペトロに「サタン引き下がれ」と厳しいことばを発せられたイエスは、その弟子のために祈っておられたに違いありません。彼らも、ご変容の山に響いた「これはわたしの愛する子。わたしの心に適う者。これに聞け」という御父の御声に聞き従うことができるよう祈られたにちがいありません。イエスのこの祈りに支えられて、モーセとエリアとイエスのために仮庵を建てて、ご変容の山に留まろうとした弟子たちは、イエスに付き従って、ご変容の山を下り、受難の死が待つエルサレムに向かうイエスの御後に従ったのでした。それが御父のみ旨

だと理解できないまでも、彼らもまた十字架の待つエルサレムへと導かれたのでした。そして、そのエルサレムを追われたイエスは十字架に架けられ、最後は言葉にならない断末魔の叫びをあげて、息を引き取られ、御父のみ旨を全うされたのでした。この世の理不尽の極みである無垢なる者たちの無惨な死を自らも引き受けて、十字架の上にそのいのちをささげてくださいましたのです。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という御父のことばは、イエスの十字架上の最後の叫びと一つに結ばれて、わたしたちの心に響いて来なければなりません。そしてその叫びは、広島、長崎の原爆に極まった、戦争の犠牲となったすべての無垢なる人々の叫びと重なるようにして、わたしたちの心に迫って来なければなりません。ご変容の山に響いた御父の「これに聞け」という御声が、あのご変容の山の弟子たちのように、それに耐ええないわたしたちの心に刻み込まれる恵みを願って祈りたいと思います。